19 世紀末～ 20 世紀初頭のトルキスタンにおける社会問題
――特に人生儀礼（Xatna, To‘y, Aza）について――

ジャスル・ヒクマトラエフ

本発表では、19 世紀末～ 20 世紀初頭のトルキスタンにおける大きな社会問題の一つである「人生儀礼」について考察した。具体的には結婚式（To‘y）、葬式（Aza）、割礼（Xatna）を取り上げ、当時のムスリム知識人が「人生儀礼」についてどのように考えていたのかを、彼らの戯曲や雑誌・新聞に載せた論説をもとに分析した。具体的には次の三点について言及した：①ハージ・ムイーン（1883~1942）の戯曲『割礼』、②アブドゥッラ・カーディリー（1894~1938）の戯曲『不幸な花婿』、③雑誌『アーイナ』に掲載されたマフムードホジャ・ベフブーディー（1875~1919）の「我々の希望もしくは願望」。

1. 19 世紀末～ 20 世紀初頭のトルキスタンにおける人生儀礼について

1919 年 3 月 22 日に新聞『労働者の声 Mehnatkashlar tovushi』にハージ・ムイーンの「人生儀礼について　To‘y va aza marosimi haqinda」という論説が掲載された。ここで彼は、当時の結婚式、割礼、葬式について詳しく述べている。彼によると割礼は 1 日から 5~6 日ほどの時間をかけて行われていた。結婚式も五つの部分からなっていた。また、この論説によると葬式にもたくさん金が使われ、人が亡くなってからその家族は「3 日 uch」、「7 日 yetti」、「20 日 yigirma」、「40 日 qirq」、「一周忌 yil」の日に近所や親戚の人々に伝統的な料理「プロフ」をふるまわなければならなかった。

上記の儀礼のいずれも主催者には大きな負担がかかる儀礼であった。

2. 戯曲『割礼 To‘y』におけるハージ・ムイーンの見解

ハージ・ムイーンはヌスラトッラ・クドラトッラと共に 1914 年に戯曲『割礼』を書いた。『割礼』は 1914 年末にトゥラン劇団によって上演され、成功をおさめた。『割礼』は 1915 年 6 月 1~3 日にフジャンド（Xo‘jand）でも上演されたことを証明する戯曲ポスターがアブドゥッラ・アウラーニーの記念館に所蔵されている。

『割礼』は、息子の割礼のために大きな祝祭をあげ、その結果破産してしまう資産家（バ

イ）を描いた作品である。資産家は盛大な割礼をあげないと人々に笑われ、尊敬を失うと考え、盛大な儀礼をあげる。その結果、すべての資産を割礼に使ってしまい、破産するという筋書きの悲劇作品である。

ハージ・ムイーンはこの戯曲を通じて二つの大きな社会問題を取り上げている。一つは、民衆の経済的な困難であり、もう一つは、悪習の蔓延である。ダムッラーの発言を通じて祝宴（bazm）で行われる「juvonbozlik 稚児遊び」や「mayxo‘rlik 飲み会」はイスラムに反することを民衆に伝えようとしている。「juvonbozlik 稚児遊び」とは少年（juvon）の踊りを楽しみながらの飲み会である。この戯曲では銀行員の役を通じて人生儀礼を小規模に行うように呼びかけている。

3. 戯曲『不幸な花婿 Baxtsiz kuyov』におけるアブドゥッラ・カーディリーの見解

アブドゥッラ・カーディリーは『自伝 Tarjimai hol』に「1913 年に出版されたベフブーディーの『父殺し』の影響で『不幸な花婿』（1915）を書いた」と述べている。

『不幸な花婿』も悲劇作品であり、一人の孤児が叔父の圧力で借金し、結婚する。しかし、結婚式後にお金を返せなかったため家を失い、自殺する。夫の自殺に耐えられなかった妻も後を追って自殺してしまうという筋書きになっている。

この作品ではひたすら経済的な負担の重さが強調されている。

4. 雑誌『アーイナ』の「我々の希望もしくは願望 A’molimiz yoyinki murodimiz」におけるベフブーディーの見解

ベフブーディーは、1913 年 11 月 30 日付（6 号）と同年 12 月 7 日付（7 号）の『アーイナ』に「我々の希望もしくは願望 A’molimiz yoyinki murodimiz」と題する論説を書いている。6 号の論説では、ベフブーディーは人生儀礼の問題点を指摘し、強く批判している。7 号では人生儀礼に使うお金の一部を教育の発展や人材育成に使うべきと述べている。

ベフブーディーは「トルキスタンの民衆の大多数の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである」と述べ、民衆は結婚式を自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な式をあげようとすると指摘している。

この論説からは、当時、昼も夜も長時間働き、食べ物も着る物も我慢する貧しい職人の希望も、盛大な結婚式であったことを例示している。

また、ベフブーディーは結婚式に途方もない資金がかかることを指摘し、次の論説では結婚式を小規模にし、余った資金で児童をイスラム式とロシア式に教育するように呼びかけている。また、青年を海外に送り、宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成すべきと主張する。

5. 結論と今後の課題

以上見てきたように、ジャディード運動の指導的な知識人はいずれも、当時の人生儀礼のあり方を批判し、小規模で行うように呼びかけている。ハージ・ムイーンの『割礼』に描かれているように、当時の資産家は一度の割礼で破産してしまった。また、カーディリーの『不幸な花婿』の若い夫婦も、結婚式のために借りた金を返せず、家を失い、自殺してしまう。

上記の二つの戯曲は誇張して書かれているように思われがちだが、ベフブーディーの『我々の希望もしくは願望』を分析すれば、上記の二つの戯曲のストーリーは、日常的に起こっていたことが分かる。これについてベフブーディーは次のように述べている。

> 職人の 20 年間働いて稼いだ金は 3 日間の結婚式でなくなる。[中略] 盛大な結婚式をあげて妻をめとった一部の貧乏人の状況には泣かされる。3 日間の結婚式の「喪」は家族によっては 10 年、さらに一生続くときもある。しばしば結婚式は家を失い、家が荒れる原因となる。

この発言からも分かるように、当時の人生儀礼は大きな社会問題だったのである。トルキスタンのムスリムにとって結婚式、割礼、葬式などは大事な儀礼であり、民衆は無理をしてでも人生儀礼を行っていた。

ベフブーディーは経済的な困難を指摘し、さらに、人生儀礼を小規模にし、その余った金を人材育成のために使うべきと述べている。なぜなら、ベフブーディーにはトルキスタン自治を実現する夢があったからである。彼にとって、トルキスタン自治の実現は極めて重要なことであり、それにはムスリム青年を教育することが不可欠なことであった。彼は若い新世代の知識人に期待をかけており、民衆に自由と発展をもたらすのは教育を受けた青年であると考えていた。

以上見てきたように、当時、経済的な面でも文化の面でも「人生儀礼」は社会の大きな問題であり、知識人はそれを解決しようと努力していたのである。

今後の研究では社会問題と教育改革の関連性をより詳しく考察したい。また、ジャディード運動の歴史的展開をもっと深く調べ、当時の教育改革運動の背景状況を明確にしたい。さらに、ジャディード知識人の著作、戯曲、詩などを分析し、彼らの新しい教育の構想を明らかにしたい。

（東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程）